

ボランティア団体が行う自助具作成と作業療法士の連携の可能性

小 野 沙 絵 北 瑞 希 弓 田 美 織 由 本 舞

杏林大学保健学部作業療法学科4年

【はじめに】

自助具とは、福祉用具の一種で、障害されている機能を補い、目的とする作業を可能にする道具である¹⁾。作業療法士（以下OT）は、自助具の作成および提供に重要な役割を持つ²⁾。しかし、近年では、制度的な問題や時間的制約などから、自助具作成に携わることが困難になっている。現在自助具の作成や提供には、医療従事者だけでなく様々な人が関与している。しかし、これらの人の自助具作成や提供のあり方は明らかではない。本研究では、ボランティアで自助具を作る人々の特徴を明らかにし、OTとの連携の可能性について探った。

【方法】

質的記述的研究法を用い、4名の対象者に半構造化面接を実施した。録音したインタビューは逐語録を作成した後、熟読し、同じ意味を呈するものを集め、定義付けし、概念として命名した。さらに概念間の関連性を考慮しつつカテゴリーを導き出した。上記のプロセスを繰り返し、概念、カテゴリー間の結び付け方の適切性を吟味した。

【結果】

対象者は平均年齢71歳の男性で、いずれも退職後、同一のボランティア組織に所属していた。対象者は、各自が組織内では自分の知識・経験・得意分野を生かした役割を分担し、かつ、自分の好きな時間や場所で自助具を作成していた。また、対象者全員が過去に物作りやそれに関わる仕事をしており、その知識や経験を「人のために生かした

い」と考えていた。自助具は、個人から依頼される生活に密着した物、団体から依頼されるパズルなど様々であり、作成数は年間100-150件程度で、作成に要する時間は1週間から数年などまちまちであった。対象者は、使用者や依頼者とできるだけ交流することを心がけ、ニーズにあったよりよい自助具の提供を望んでいた。また、対象者は自助具の作成だけでなく、一般の人やOTへの広報活動を行っていた。OTには、作品や制作方法を知ってもらうだけでなく、将来的にはOTから依頼を得る、疾患や障害の知識を得る、フィードバックを得るなどの連携を望んでいた。

【考察】

ボランティアで自助具作成に携わる人は、OTが持たない工学的な知識や技術を活かしていた。また、ボランティアでは、OTが感じるような業務上の時間的制約なしに自助具づくりに携わっていた。ボランティアとOTは異なる特性を生かして連携することで、より幅広い層に、よりよい自助具を提供ができる可能性がある。さらに、自助具作成は、退職者や高齢者の生きがいにつながる作業を提供する場として活用することが可能であり、OTが積極的に関わることが、高齢者のQOL向上や地域の活性化に繋がると考える。

【参考文献】

- 1) 岩崎テル子, 小川恵子, 小林夏子, 福田恵美子, 松房利恵: 標準作業療法学専門分野作業療法評価学第2版, 医学書院, P316, 2011
- 2) 林正春: 自助具の活用, OTジャーナル, P742-749, 2014